知っ得！
日本史研究
最前線！

長篠・設楽原の戦いは「鉄砲隊」vs「騎馬隊」だったのか

――――新城市設楽原歴史資料館　湯浅大司

『菅沼家譜』より設楽原布陣図（宗堅寺蔵／新城市設楽原歴史資料館提供）

はじめに

私たちが知っている「長篠の戦い」。近年，長篠城がきっかけとなり，設楽原（したらがはら）で決戦が行われたため「長篠・設楽原の戦い」ともよばれるようになったが，研究が進み，多くのできごとが明らかになってきている。今回はその中で，武田軍の動きと織田・徳川連合軍が使用した火縄銃について紹介をしたい。

武田軍は長篠城をなぜ落とせなかったのか

「長篠・設楽原の戦い」のきっかけとなった長篠城は宇連川と豊川という大河の合流地点に位置している。この川に面している部分は断崖になっており，まさに堅城といえる。

長篠城を守る兵は奥平信昌を城主に500人たらず。一方，攻め寄せる武田軍は1万5000人。結果として長篠城は武田軍の猛攻に耐え，落城することはなかった。しかし，一つの疑問がわく。なぜ30倍の兵力で落とすことができなかったのか。

『長篠日記』の中に馬場信房が軍議の際に述べた言葉が記されている。「美濃守申ワ，左在者，長篠ノ城ヲ俄攻ニ被成候者，味方之手負死人千人ト積リ」1000人の犠牲を覚悟すれば，長篠城は攻め落とせるといっている。1000人の犠牲を出させないために力攻めをしなかったのであるが，その一方で5月1日に長篠城を取り囲んだ武田軍は，6日に主力を率いて東三河の拠点である吉田城を包囲している。結局，吉田城を攻めあぐねたためその囲みを解き，再び長篠城に戻っていった。このような動きをみると，その目的は長篠城を得ることではなく，徳川軍との決戦であったと考えることができる。徳川軍は設楽原の決戦では8000人を動員している。武田軍はその倍近くをようしていたので，兵力的には圧倒している。武田軍は徳川軍を野戦に誘い出すため，長篠城を落とさなかったとみるのは深読みのしすぎであろうか。これ以前に行われた高天神城の攻防ではその救援に家康は出張るが，落城の報を聞き，兵を引いている。長篠城を落としてしまったら，徳川軍との決戦は遠のく可能性があるため，あえて力攻めをしなかったと考えたい。

連合軍はなぜ設楽原を選んだのか

連合軍は長篠城を救援するため，軍を進めた。長篠城救援のためであれば，長篠城を取り囲む武田軍を追い出すべきなのだが，長篠城の2キロほど手前の設楽原で陣を敷いた。これは武田軍との決戦を想定し，連合軍にとって戦いやすい地形であった設楽原を戦場として選択した結果であった。

設楽原は北に雁峰山，南に豊川，東と西に台地を抱え，さらにその中央には連吾川が流れ，その流域には水田が広がっていた。連合軍は連吾川西の弾正台地に陣をおくことによって，この狭く囲まれた地域に武田軍を誘い出そうとしたのである。そして連吾川沿いに柵を築き，万全の防御態勢をとった。武田軍の攻撃力を狭い空間の中に閉じ込め，さらに水田と連吾川でそぎ落とし，馬防柵によってくいとめるという二重，三重の準備をしていたのである。それは逆に連合軍が武田軍の恐ろしさを知っていたともいえるであろう。

なぜ武田軍は無謀な戦いにいどんだのか

武田軍にとってみれば，家康が設楽原にやってきたことは千載一遇のチャンスであったのかもしれない。しかし，現在の私たちは歴史の結果を知っているため「どうして勝頼は無謀な戦いをしかけたのか，ここで兵を引いていれば滅亡することはなかったのに」という疑問を抱いてしまう。

勝頼が決戦前日に書いた手紙が遺されている。そこには「然者長篠之地取詰候之処，信長・家康為後詰雖出張候，無指儀及対陣候，敵失行之術，一段逼迫之躰候之条，無二彼陣へ乗懸，信長・家康両敵共，此度可達本意儀案之内候」とあり，勝頼自身は負けるということは考えていない。

連合軍は3万8000人。圧倒的に武田軍は不利であるが，それでも連合軍が布陣した設楽原へと陣を進めた。武田軍が陣をおいた場所は連合軍の陣地から200メートルほど離れている。火縄銃や弓の射程距離の外であり，武田軍が前に進まないと玉も矢も当たらない。つまり開戦のきっかけは武田軍にあったのである。この時点では兵力の差はあるが，私たちが思うほど武田軍は不利ではなかったのである。それをきらった連合軍は鳶ケ巣山への奇襲攻撃をしかけることによって武田軍の背後に兵をまわし，開戦のタイミングを自軍に引き寄せたのである。

鉄砲三段一斉射撃の真実

この戦いのなかで最も知られていることの一つに「大量の火縄銃を利用した」ということがあろう。その数は1000丁とも3000丁ともいわれている。連合軍はこれだけ大量の火縄銃を所有し，十分に活用できる経済力をもっていた。これは他の大名を圧倒する経済力であった。また，この大量の火縄銃を用いて「三段撃ち」，しかも「一斉射撃」を行ったとされていた。設楽原を流れる連吾川沿いに2キロにわたって馬防柵を築き，その内側で1000人ずつが3列になって火縄銃を撃ったというのである。信用のおける史料として『信長公記』があるが，ここには三段撃ちの話は出てこない。史料価値が低いとされる『信長記』に「千挺宛放ち懸け，一段宛立替々々打すべし」とあり，これは作者の創作であるとされている。こうした史料の読み直しにより研究が進み，現在では，「鉄砲三段一斉射撃」は否定されつつある。

今回は史料からではなく，実際にできるのかどうかという点で確認していこう。

まずは「一斉射撃」。1000人が同時に火縄銃を撃つということは，絶対に不可能である。号令をかける声が届かない。さらに武田軍が横一列に並んで馬防柵へと突撃するということはありえず，1000人が同時に撃つような場面はない。

問題となるのは「三段撃ち」である。火縄銃を一発撃つためには30秒程度かかる。そのタイムロスを短くするために考え出されたのが3人1組になって撃つという三段撃ちである。考え方として成立する撃ち方ではある。私は地元で鉄砲隊に入っており，三段撃ちも経験しているが，30秒がこの撃ち方で10秒になるかというとなかなか難しい。うまくいって20秒程度である。多少早くなるという程度である。

ただ，『信長記』にある「立替々々」という場面は実際にあったのではないかと考えられる。号令によるものではなく，撃ち終わったら玉を込めるために後ろへ下がる，撃つ準備ができたら前へ出てゆく，そのような要領で行われていたのではなかろうか。

また，タイムロスの問題が解決していないが，連合軍は3万8000人の兵がいる。鉄砲隊はその1割にも満たない。決戦は鉄砲隊だけで行われるのではなく，弓や槍を持った人も最前線に配置されていたはずであり，火縄銃を撃てない時間は彼らが対応したと考えるべきであろう。そうしたことを考えると火縄銃の多寡がその勝敗に影響を与えたことはあったであろうが，それは決定的なものではなく，兵力の差と地の利が連合軍に勝利をもたらしたものと考えられる。

「長篠・設楽原の戦い」は戦国時代を代表する戦いの一つであり，長い年月をかけて事実にいろいろな逸話がつけ加えられた。そういった逸話を吟味しながら戦いを検証することもまた興味深い。

【参考文献】
新城市設楽原歴史資料館編『古戦場は語る――長篠・設楽原の戦い』（風媒社，2014年）